



小さな社会

豊橋市立北部中学校一年 中嶋 この花

私の母は真面目だ。真面目なだけではなく、努力家だ。全てを完璧に行おうとするので、私はそんなに無理してやらなくても良いのに。と、思っていた。

母が一日仕事に行くようになったのは、半年前のことだ。それまでは、朝から昼までの四時間だった仕事の時間を夕方まで延ばした。母は仕事の時間が長くなり、帰宅時刻が遅くなっても全てのことに妥協しなかった。次の日の夜ご飯も前日に作っておいたり、朝も早く起きて私達の朝食を作った。仕事へ行く父の弁当も作り、掃除機をかけ、トイレ掃除もして自分は仕事へ出かける。仕事の休憩時間に一度帰宅すると、洗濯物をたたんだり、家事をしたりして、また職場に戻って仕事をした。

母の仕事は土曜日や日曜日が休みではない。そうになると、私達が休日の時、母は朝から私や妹達に分までお昼ご飯を用意して仕事へ行くことになる。母は毎日、早朝から起きていた。

「誰がやっても良いのに…」

ポツリと母がつぶやいたのは、私が中学校に入学した頃だった。

「何で私の生活は変わったのに、あなた達の生活は変わらないの。」

と、母は苦しそうに言った。父が母に、

「何か手伝えることがあるならやるよ。言ってくれたらやるから。」

と、言った時だ。母は泣き出しそうになり、

「手伝うって何…。家族なんだから、家のことは誰がやっても良いんだよ。いつまでも手伝い気分でしたら何も変わらないんだから。」

私は、半年前の母の言葉を思い出していた。

「お母さんが仕事の時間を長くしたら、君達の生活も変わるんだからね。お母さんだけ変わるなんておかしいんだよ。」

と、母は言っていたのだ。その時は、あまり意味が解らず聞き流していたけれど、今まで家のことをしていた時間を仕事の時間に充てるということは、その分、家のことをする時間が削られるということなので、今までのように家事ができない、ということだ。では、母はどうしていたか…。仕事の時間を長くしてから、朝の起きる時間を一時間も早くしていたし、思い返してみると仕事から帰宅しても座らず、そのまま家事をこなしていた。

母は家族のために動いてくれていたのに、私は何をやっていたのだろう…。無理してやらなくても良いなんて思っていたことに罪悪感を持った。無理をさせていたのは、家族である私達だったのだ。そして真面目な母だから、全てを完璧にやりたいと思い、自分をどんどん追い込んでしまったのだろう。

私達は母の気持ちを解っていたのだろうか。仕事をしたい、でも家のことも諦めたくない、と努力していた母の気持ちを何も解ろうとしていなかった。母は、仕事の時間を長くしてから私達に対して諦めてはいなかった。学校での出来事もいつも聞いてくれていたし、習い事の送迎もしてくれていた。自分の時間を削って、私達に向き合ってくれていたのに私達は母の自由や休む権利を奪っていたのではないか、と思った。

真っ先に動いたのは父だった。母が私達にSOSを出した次の日から、母と同じ時間に起きるようになった。そして、母の行っていた朝の家事を少しでも、と行うようになった。それだけではなく、父は土曜日や日曜日の昼食を作ってくれるようになり、洗濯物も干すようになった。母が一人で担っていた家のことを、父もどんどん行うようになったので、母はとても楽になったように見えた。

私や妹達も負けてはいられない。自分達が休みの時は、洗濯物をたたんだり、食器を洗って拭いたりした。簡単な料理なら自分達で作るようになった。家事を行ってみると、母がどれだけ毎日頑張ってくれていたのかが解った。

「今日もみんなが元気だったので仕事へ行くことができました。ありがとうございます。」

「洗濯物、たたんどいてくれたの、助かったよ。ありがとう。」

私達が家事を母と一緒にやるようになってから、母の笑顔が増えた。そして、私達家族に「ありがとう」という言葉が増えた。それは母がいつも行って欲しかった家の事を知ることができたからだ。

家族は小さな社会だと思う。いつも当たり前と一緒にいるからこそ忘れてしまいそうになる思いやりもある。相手に気づかないうちに負担を与えている場合もあるだろう。けれども、誰か一人が無理をして大変な思いをするのではなく、家族だからこそお互いがお互いを支え合い、尊重できる立場でありたいと思った。